

一向一揆をどう語るか—幕府・宗門・歌舞伎—

塩谷 菊美

①覚如【親鸞伝絵】1295年（中学・高校部活動型の学習、ドラえもん型の学習）

箱根霊告段：夜の箱根山で、神が親鸞聖人を饗応した。

熊野霊告段：親鸞の弟子の平太郎が身を清めずに熊野に行き、神に叱られそうになったが、親鸞が夢の中に出て来て自分の弟子であると言い、神はひざまづいた。

②作者不詳【越州軍記】1577年

（平泉寺方は）初霜の巳の刻ばかりに照り光る、三枚白釵の甲に、蟋蟀の角の鋏形打ち、草葉の上の白露の、嶺の嵐に一揉もまれたる如くなる臍当して、

（一揆方は）蜘蛛の網の甲を着、蚊虻の羽の大立拳の旗を差し、蚯蚓の骨の桶皮綴の腹当に、鼠子の角の鋏形打ち、土籠の目のかがやくばかりなる、親重代の三尺七寸の太刀をはき、

③太田牛一【信長公記】江戸時代初期？

一揆蜂起せしめ、渡りの舟を隠し置き、通路自由ならず。稲麻竹葦などの如く、過半竹鑓を持って、江口川の向ひを大坂堤へ付いて喚き叫ぶといへども、異なる事なし。信長公川の上下懸けまはし御覧じ、馬を打ち入れ、川を渡すべきの旨、御下知の間、悉く乗り入れ候ふのところ、思ひの外、川浅く候ひて、かち渡りに雑兵難なく打ち越し候。九月二十三日、公方様供奉なされ御帰洛。次日より江口の渡り、かちわたりには中々ならず候。これを以て江口近辺の上下万民の者、奇特不思議の思ひをなす事なり。

④井上家正【後太平記】1677年刊

国々の門徒、僧俗愚迷、村老野人、田夫樵夫に至るまで、日夜に継いで馳せ集り、（信長が怒って言うには）近年、寄せ手の内にも彼が宗旨多くして、鉄砲に玉を込めず、矢の根を抜けば、諸方の民口に此の宗を城いぬ宗と名付くと云へり。全く其の議に非ず。僧に非ず俗にも非ず、其の法、人倫に遠く畜類に近ければ、真白犬に非ずや。

⑤林羅山・鷲峰【本朝通鑑】1670年

（三河の上宮寺・本證寺・勝鬘寺の三ヶ寺が）国中の邪徒を集め、蠅のごとくに屯まり、菅沼が砦に入りて糧米を取りて帰寺す。菅沼これを憤り、酒井正親に之を訴ふ。神君正親をして寺僧を糾断せしめて、其の首謀者を誅す。邪徒大いに怒り、国中の檀越門徒を促し、蜂起囂囂たり。

⑥成島司直【改正三河後風土記】1833年

一、(略)一向宗は戒律を受持せずして女犯をゆるし、齋食^{さいじき}を行はずして肉味^{くろみ}を喰ひ、仏尊^{ぶつそん}を汚し又神明^{しんめい}を穢^{けが}したり。仏法僧の儀式に背いて王公守將^{おうこうしじやう}の法度^{はつと}を守らず。是^{これ}兵乱の因縁、亡国の基^{もと}、禁じても猶禁^{なほ}ずべきは此^{この}宗門たるべきか。

一、(略) 国賊の徒とすべきものか。

⑦恵空【叢林集 板本】1714年刊

(信長が本願寺を怨んだきっかけは、浅井長政の子息の一人が三井寺某法印の弟子となり、娘が顕如の室となったことだ〈浅井殿の娘は九条殿の室、細川殿の娘が顕如室〉。信長が浅井を破って比叡山を攻めたとき、三井寺の法師は顕如を頼り、天満の御坊に匿まわれたが、信長に夜討され、顕如は無念に思った。) 已上^{いじやう}本願寺相伝^{くだんのごとし} 如 件。

【叢林集 自筆本】

(教如の母は細川晴元の娘、朝倉義景は晴元の甥で、細川・朝倉は信長の強敵であった。元亀元年、信長が三好を攻撃したとき、諸方の門徒が本願寺に駆けつけて抵抗し、信長は帰京した。) 同二年には尾州長島に一揆起り、下間^{しもつま}三位頼且^{さんみ}を下して大将とせり。同五年江州北郡に一揆大に起り、神崎の小川、野洲の金森、所々の蜂起みな御門徒の企て也。越前・越中の蜂起、亦しか也。信長の思ひ不安も尤也。

⑧立耳軒【石山軍鑑】1771年

途中に待ち居る百姓共、竹槍・鋤・鍬等にて横合より突き立て、たたき立て、老いたる者は胡椒の粉を紙袋に詰めたるを、道端の小高き所より目鼻の嫌いなく面部を目懸けて投げ付け、また女童^{すりこぎ}は杓木・杓木など勝手道具を振り立て、法敵^{ゆり}免すなとたたき立て、七八十の老人まで牙を噛み、法敵の天魔を打ち殺さんと、

⑨【江戸時代の歌舞伎・浄瑠璃・絵本読本】

- 1780年 歌舞伎 帰命曲輪文章 (あなかしこくるわぶんしょう)
- 1790年 浄瑠璃 近江八景石山遷 (おうみはっけいいしやまうつり)
- 1791年 浄瑠璃 彫刻左小刀 (ちょうこくひだりこがたな)
- 1797年 絵本読本 絵本太閤記 (えほんたいこうき)
- 1799年 浄瑠璃 絵本太功記 (えほんたいこうき)
- 1800年 歌舞伎 恵宝太功記 (えほうたいこうき)
- 1801年 絵本読本 絵本拾遺信長記 (えほんしゅういしんちょうき)

⑩^{かつげんぞう}勝彦藏【御文章石山軍記】1880年

すべて石山本願寺大門の体。幕の内より^{おおべや}大部家・女形^{さうで}惣出の人数、思ひ思ひのこしらへにて、鍬・鋤・天秤棒・六尺棒・畑打棹等、好みの^{えもの}得物を持ち、時の声を上げ、寺の早鐘にて幕明く。(略)

婆々　これ娘、押し返されて踏み殺されなよ。

お春　私しゃ殺され、早うお如来様の傍へ行きたいわいなア。

親仁　そうじゃそうじゃ、何でもここが御本山への御奉公、何とマア有難い御宗旨じゃないか。

十助　何か御本山に事があるとて村々へお使いを下され、御門主様が御相談なされたいとの事じゃ。

八兵衛　イヤモウ何^{わきま}弁えもないわし等まで、御門下と思し召され、召し寄せられるも、他力本願の有難さじゃ。